

## 7-1

 大津市民の生涯学習に関する調査  
 -学習を通しての交流の広がりや生涯学習-

滋賀大学 社会連携研究センター 教授 神部 純一

## 1. 調査の目的と方法

## (1) 調査の目的

2006（平成 18）年に教育基本法が改正され、その中に「生涯学習の理念」として、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」という条文が新たに加えられた。これが現在、わが国が目指している「生涯学習社会」の姿だといっているであろう。それは、国民一人ひとりが、いつでもどこでも自由に学べるだけでなく、その成果をいろいろな形で生かすことで個人と社会の両方の豊かさを実現する社会である。

こうした社会の実現のためには、今後、人生の各段階における個人の学習要求に応えるとともに、地域や社会の課題解決に役立つ学習機会の充実や、学習者同士の「ふれあい」や「交流」を意識した学習支援が重要になるであろう。

近年、「ソーシャル・キャピタル」が様々な分野で注目されている。「ソーシャル・キャピタル」とは、「人々が他人に対して抱く『信頼』、それに『情けは人の為ならず』『お互い様』『持ちつ持たれつ』といった言葉に象徴される『互酬性の規範』、人や組織間の『ネットワーク（絆）』<sup>1)</sup>」である。内閣府は、2002 年度にソーシャル・キャピタルに関する調査を行っている<sup>2)</sup>。調査結果をみると、ソーシャル・キャピタルの要素である「つきあい・交流」や相互の「信頼」関係といった項目で、その程度が高い人が ボランティア・NPO・市民活動を行っている率も高くなっていったのである。この結果に基づけば、学習過程の中で学習者の協調行動を活発化することができれば、彼らの学習成果を地域の様々な活動に生かす可能性を高めることができるのではないだろうか。

本調査は、大津市民の生涯学習や生涯学習成果の活用の実態とニーズを把握するために実施した「生涯学習に関する市民アンケート調査」の結果を活用して、学習を通しての地域の人との交流の広がりや生涯学習との関わりについて検証することを目的としている。

## (2) 調査の方法

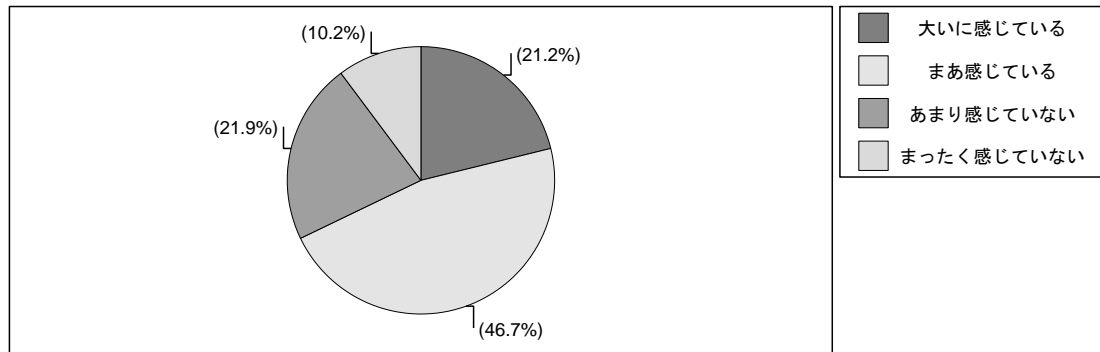
調査の方法は、以下の通りである。

- 1) 調査対象 : 20 歳以上の大津市民
- 2) 標本数 : 3,000 名
- 3) 抽出方法 : 住民基本台帳を用いた無作為抽出
- 4) 調査方法 : 質問紙による郵送調査
- 5) 調査期間 : 平成 28 年 6 月 10 日～6 月 24 日
- 6) 回収結果 : 1,157 名（回収率 38.6%）

## 2. 学習を通しての交流の広がりの実態と属性分析

### (1) 学習を通しての交流の広がり

図1は、学習を通しての交流の広がりを感じている程度をみたものである。

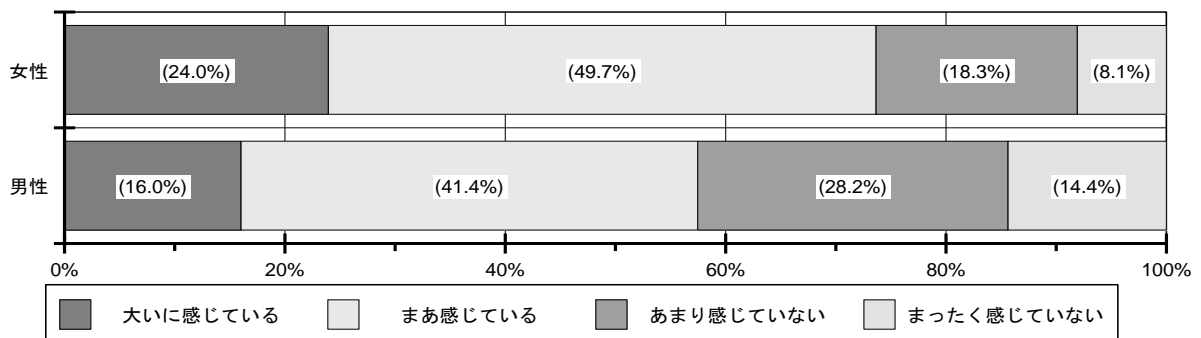


【図1 学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

その結果、21.2%の人が交流の広がりを「大いに感じている」と回答し、「まあ感じている（46.7%）」をあわせると67.9%の人が、交流の広がりを「感じている」と回答していた。

### (2) 属性分析

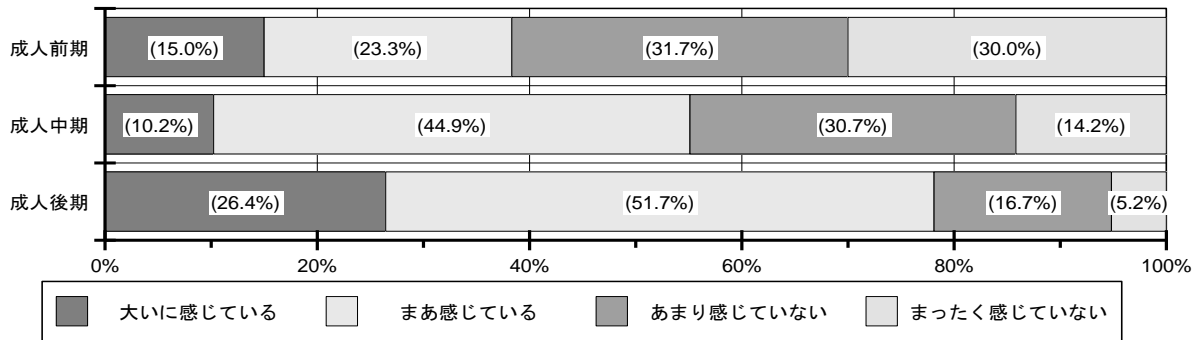
これを、性別にみたのが図2である。



【図2 性別にみた学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

その結果、交流の広がりを「感じている（「大いに感じている」+「まあ感じている」）」人の率は、「女性」で73.7%、「男性」で57.4%であり、「女性」の率が高くなっていた。

次に、年代別にみたのが図3である。



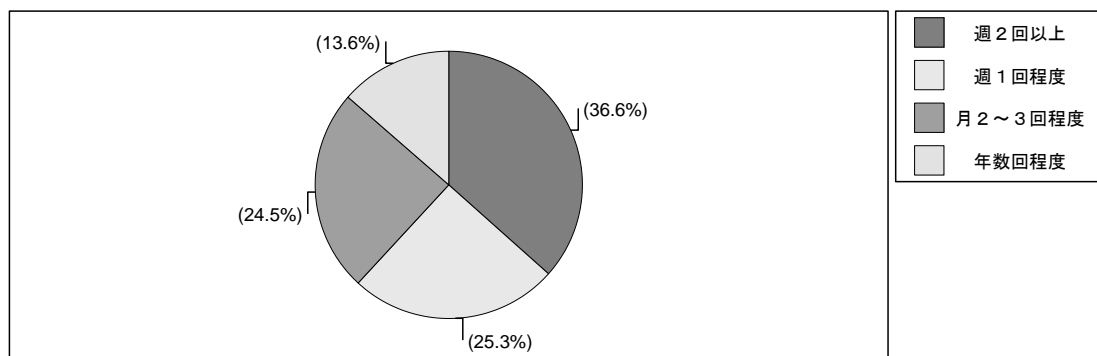
【図3 年代別にみた学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

その結果、交流の広がりを「感じている（「大いに感じている」＋「まあ感じている」）」人の率は、「成人前期」の人で 38.3%、「成人中期」の人で 55.1%、「成人後期」の人で 78.1%であり、「成人後期」の人の率が高くなっていった。

### 3. 学習を通しての交流の広がりや学習の頻度

#### (1) 学習の頻度

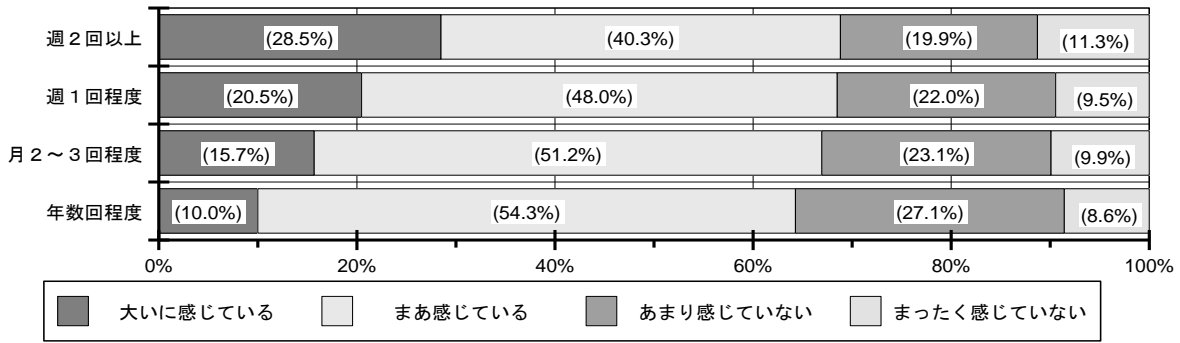
図4は、この1年くらいの間、学習の頻度をみたものである。



【図4 学習の頻度】

その結果、「週2回以上」と回答した人の率が 36.6%でもっとも高く、次いで「週1回程度（25.3%）」となっていた。

図5は、学習の頻度別に、学習を通しての交流の広がりを感じている程度をみたものである。



【図5 学習の頻度別にみた学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

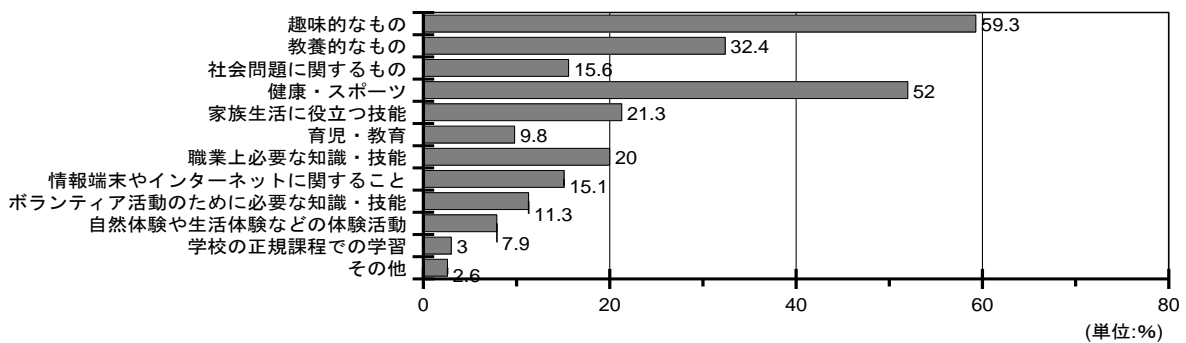
その結果、交流の広がりを「感じている（「大いに感じている」＋「まあ感じている」）」人の率は、「週2回以上」学習をしている人で 68.8%、「週1回程度」の人で 68.5%、「月2～3階程度」の人で 66.9%、「年数回程度」の人で 64.3%であり、頻度の間に明確な差は認められなかった。

しかし、交流の広がりを「大いに感じている」人の率では差が認められ、「週2回以上」学習をしている人で 28.5%、「週1回程度」の人で 20.5%、「月2～3階程度」の人で 15.7%、「年数回程度」の人で 10.0%となっており、「大いに感じている」と回答した人の率は、学習の頻度が高くなるほど高まる傾向が認められた。

#### 4. 学習を通しての交流の広がり と 学習内容 の実態とニーズ

##### (1) 学習内容の実態

図6は、学習の内容をみたものである。



【図6 学習内容】

その結果、「趣味的なもの」を学んでいる人の率が 59.3%でもっとも高く、次いで「健康・スポーツ (52.0%)」、「教養的なもの (32.4%)」の順となっていた。

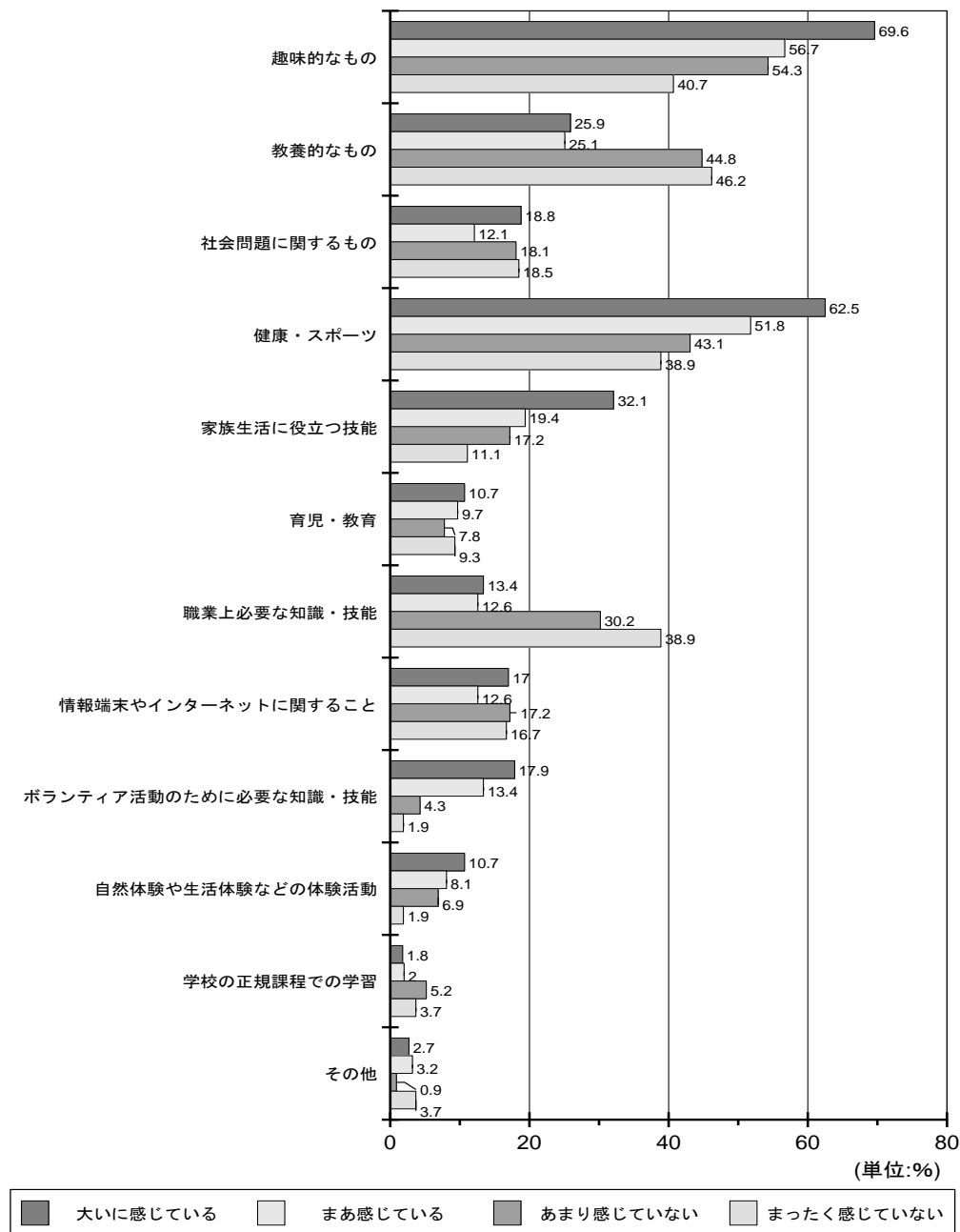
図7は、学習を通しての交流の広がりを感じている程度別にみた、学習内容である。

まず、交流の広がりを「大いに感じている」、「まあ感じている」、「あまり感じていない」人では、「趣味的なもの」を学んでいる人の率をもっとも高いことは共通していたが、次いで「大いに感じている」と「まあ

感じている」人では、「健康・スポーツ」、「教養的なもの」の順、「あまり感じていない」人では「教養的なもの」、「健康・スポーツ」の順となっていた。

一方、交流の広がりを感じていない人では、「教養的なもの」を学んでいる人の率が高くなり、次いで「趣味的なもの」、「健康・スポーツ」と「職業上必要な知識・技能」の順となっていた。

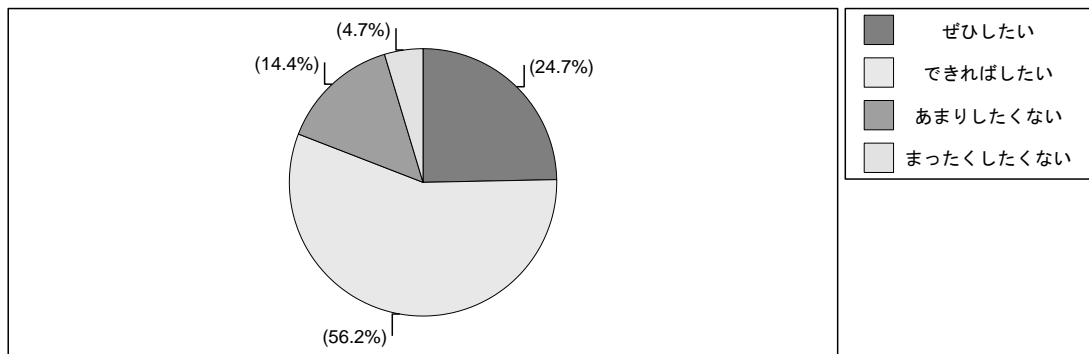
また、交流の広がりを感じている程度が高い人ほど、「趣味的なもの」、「健康・スポーツ」、「家族生活に役立つ技能」、「ボランティア活動のために必要な知識・技能」、「自然体験や生活体験などの体験活動」を学んでいる人の率が高くなっていった。一方、「教養的なもの」と「職業上必要な知識・技能」では、交流の広がりを感じていない人の率が高くなっていった。



【図7 学習を通しての交流の広がりを感じている程度別にみた学習内容】

(2) 学習内容のニーズ

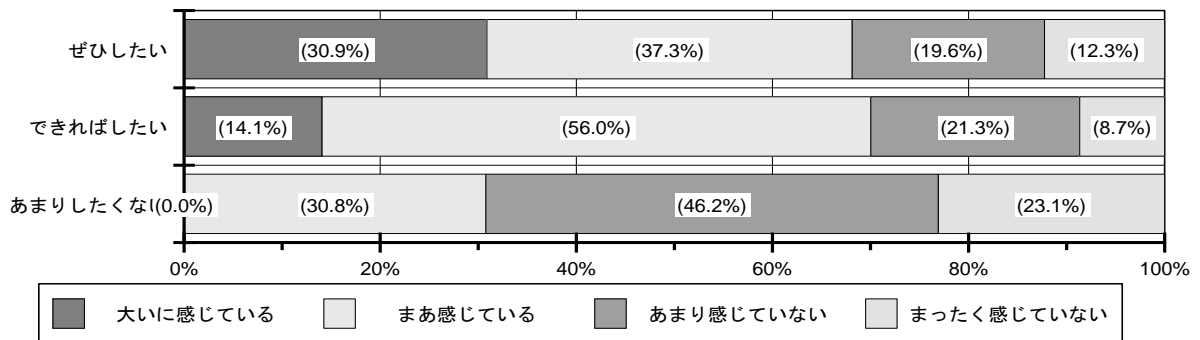
図8は、市民の学習ニーズをみたものである。



【図8 学習のニーズ】

その結果、24.7%の人が「ぜひしたい」と回答し、「できればしたい (56.2%)」をあわせると 80.9%の人が学習を「したい」と回答していた。

図9は、学習ニーズの程度別にみた、学習を通しての交流の広がりを感じている程度である。「まったくしたくない」と回答した人は2名しかいなかったため、ここでの分析からは除外する。

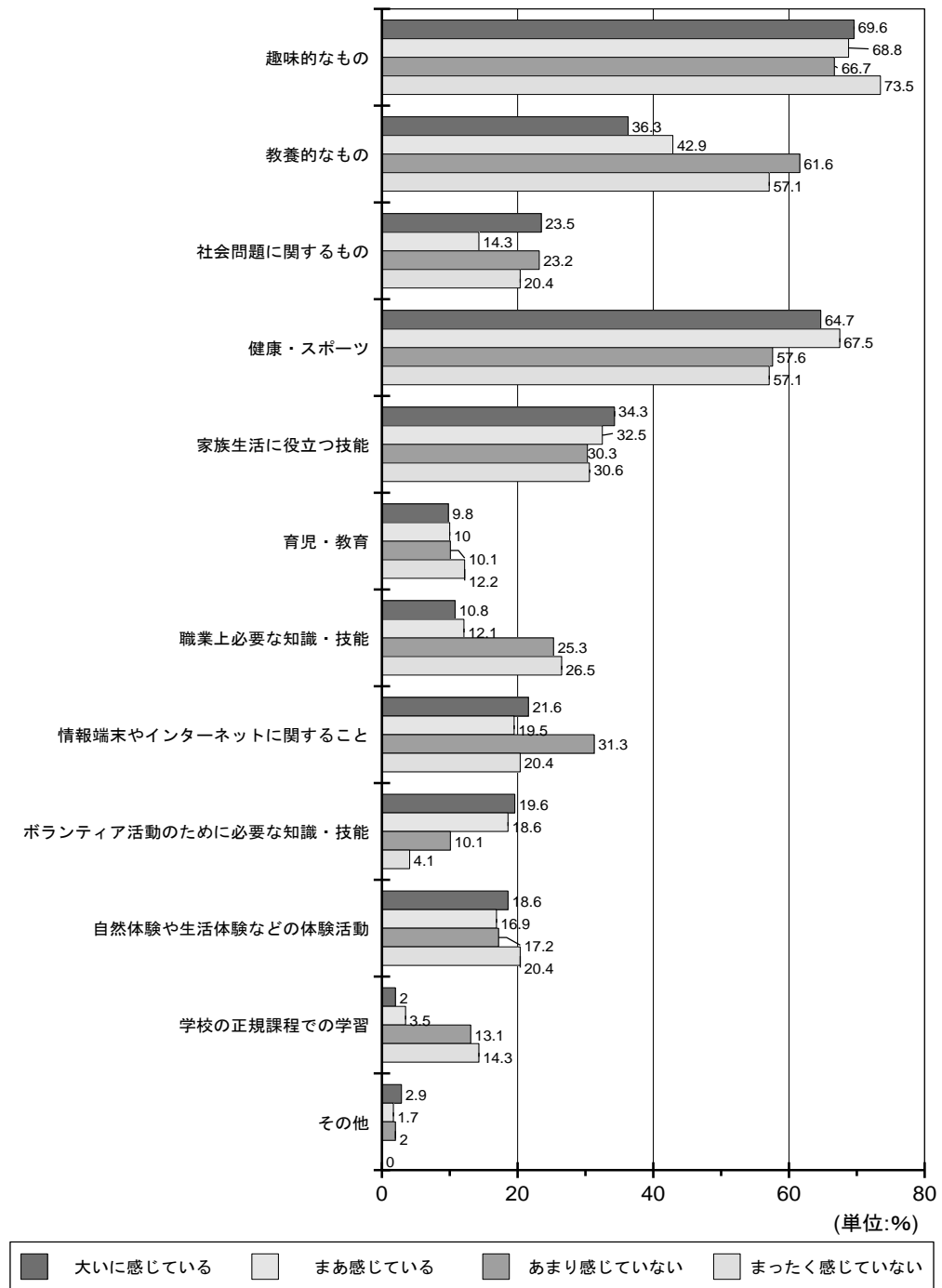


【図9 学習ニーズの程度別にみた、学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

その結果、交流の広がりを「感じている（「大いに感じている」＋「まあ感じている」）」と回答した人の率は、学習を「ぜひしたい」と回答した人で 68.2%、「できればしたい」と回答した人で 70.1%であった。特に、学習を「ぜひしたい」と回答した人の 30.9%が、交流の広がりを「大いに感じている」と回答していた。

一方、学習を「あまりしたくない」と回答した人で、交流の広がりを「感じている」と回答した人の率は 30.8%に留まっていた。

図 10 は、学習を通しての交流の広がりを感じている程度別にみた、学習内容のニーズである。



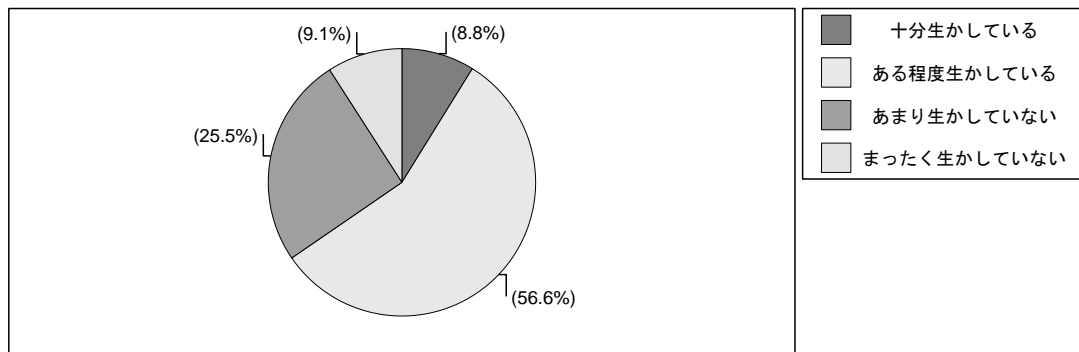
【図 10 学習を通じた交流の広がりを感じている程度別にみた、学習内容のニーズ】

まず、学習を通じた交流の広がりを感じている程度に関わりなく、「趣味的なもの」を学びたい人の率もっとも高いことは共通していたが、次いで、交流の広がりを感じている「大いに感じている」と「まあ感じている」人では、「健康・スポーツ」、「教養的なもの」の順、「あまり感じていない」人では「教養的なもの」、「健康・スポーツ」の順、そして「まったく感じていない」人では、「教養的なもの」と「健康・スポーツ」が同率となっていた。

また、「健康・スポーツ」と「ボランティア活動のために必要な知識・技能」では、交流の広がりを感じている程度が高い人の率が高く、一方、「教養的なもの」、「職業上必要な知識・技能」、「学校の正規課程での学習」では、交流の広がりを感じている程度が低い人の率が高くなっていた。

## 5. 学習を通しての交流の広がりや学習成果の活用

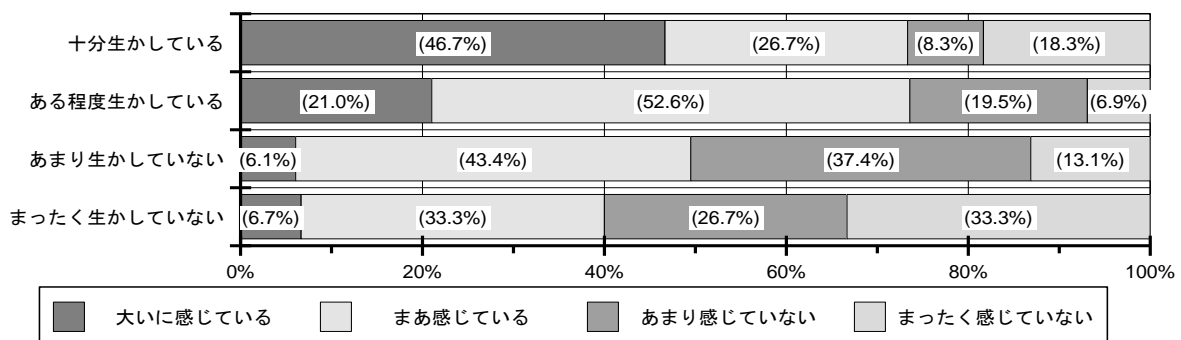
図 11 は、学習成果の活用の実態をみたものである。



【図 11 学習成果の活用の実態】

その結果、8.8%の人が「十分生かしている」と回答し、「ある程度生かしている（56.6%）」をあわせると65.4%の人が学習成果を「生かしている」と回答していた。

図 12 は、学習成果の活用の程度別に、学習を通しての交流の広がりを感じている程度をみたものである。



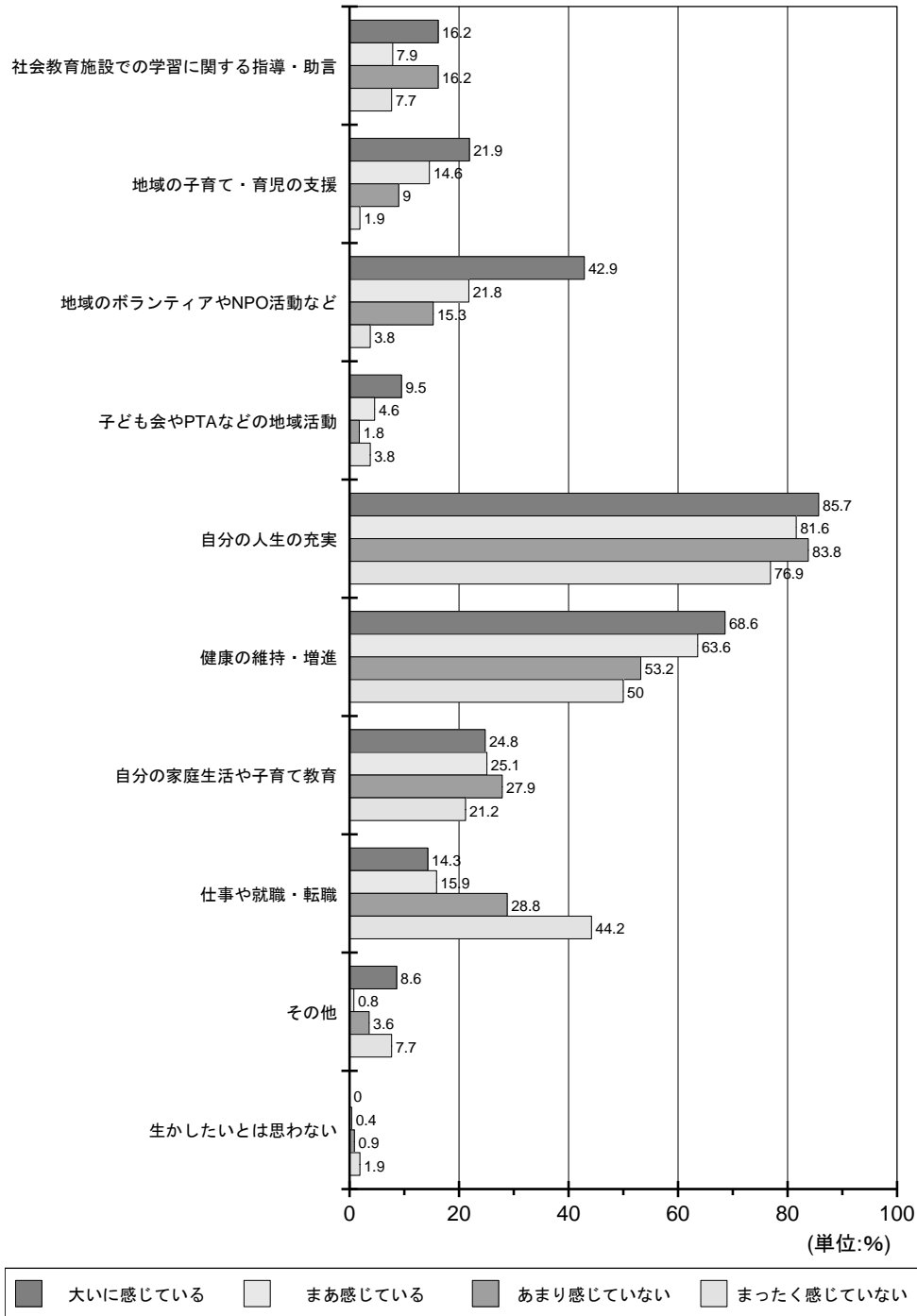
【図 12 学習成果の活用の程度別にみた、学習を通しての交流の広がりを感じている程度】

その結果、交流の広がりを「感じている（「大いに感じている」＋「まあ感じている」）」と回答した人の率は、学習成果を「十分生かしている」人で73.4%、「ある程度生かしている」人で73.6%であった。特に、学習成果を「十分生かしている」人の46.7%が、交流の広がりを「大いに感じている」と回答していた。



一方、学習成果を「あまり生かしていない」と回答した人で、交流の広がりを感じている（「大いに感じている」＋「まあ感じている」）と回答した人の率は49.5%、「まったく生かしていない」と回答した人では40.0%であり、学習を通して交流の広がりを「感じている」人の率は低くなっていた。

図 13 は、学習を通じた交流の広がりを感じている程度別にみた、学習成果の活用ニーズである。



【図 13 学習を通じた交流の広がりを感じている程度別にみた、学習成果の活用ニーズ】

まず、交流の広がりを感じている程度に関わりなく、「自分の人生の充実」をあげた人の率をもっとも高く、次いで「健康の維持・増進」であることは共通していたが、次いで、交流の広がりを「大いに感じている」人では「地域のボランティアや NPO 活動など」、「まあ感じている」人では「自分の家庭生活や子育て教育」、「あまり感じていない」と「まったく感じていない」人では「仕事や就職・転職」となっていた。

また、交流の広がりを感じている程度が高い人ほど、ニーズが高くなっていたのは「地域の子育て・育児の支援」、「地域のボランティアや NPO 活動など」、「健康の維持・増進」であり、逆に、交流の広がりを感じている程度が低い人ほど、ニーズが高くなっていたのは「仕事や就職・転職」であった。特に、「地域のボランティアや NPO 活動など」では「大いに感じている」人の、「仕事や就職・転職」では「まったく感じていない」人のニーズが高くなっていた。

## 6. 調査のまとめ

---

### (1) 学習を通しての交流の広がり

学習を通しての交流の広がりを感じている程度をみると、21.2%の人が交流の広がりを「大いに感じている」と回答し、「まあ感じている (46.7%)」をあわせると 67.9%の人が、交流の広がりを「感じている」と回答していた。

交流の広がりを「感じている (「大いに感じている」+「まあ感じている」)」人の率は、性別では「女性」の率が高く、年代別では「成人後期」の人の率が高くなっていた。

### (2) 学習の頻度

この1年くらいの間の、学習の頻度をみると、「週2回以上」と回答した人の率が 36.6%でもっとも高く、次いで「週1回程度 (25.3%)」となっていた。

学習の頻度別に、学習を通しての交流の広がりを感じている程度をみると、交流の広がりを「大いに感じている」人の率で差が認められ、学習の頻度が高くなるほど、交流の広がりを「大いに感じている」人の率が高まる傾向が認められた。高い頻度での集合学習や相互学習を継続することが、人間関係を構築することにつながるといえよう。

### (3) 学習内容の実態とニーズ

学習を通しての交流の広がりを感じている程度別に学習内容をみてみると、「趣味的なもの」、「健康・スポーツ」、「家族生活に役立つ技能」、「ボランティア活動のために必要な知識・技能」、「自然体験や生活体験などの体験活動」を学んでいる人の率は、交流の広がりを感じている程度が高い人ほど高くなっていた。こうした内容の学習が人間関係の構築につながっていることが推察される。

一方、「教養的なもの」と「職業上必要な知識・技能」は、どうしても個人学習が中心にならざるをえないためか、交流の広がりを感じている程度が低い人の率が高くなっていた。

次に、学習を通しての交流の広がりを感じている程度別に学習内容のニーズをみると、「健康・スポーツ」と「ボランティア活動のために必要な知識・技能」では、交流の広がりを感じている程度が高い人の率が高く、一方、「教養的なもの」、「職業上必要な知識・技能」、「学校の正規課程での学習」では、交流の広がりを感じている程度が低い人の率が高くなっていた。

これらのうち「趣味的なもの」と「健康・スポーツ」については、交流の広がりを感じている程度が低い人のニーズも高いが、「ボランティア活動のために必要な知識・技能」については、交流の広がりを「あまり感じていない」人で 10.1%、「まったく感じていない」人で 4.1%に留まっていた。

#### (4) 学習成果の活用の実態とニーズ

学習成果の活用の実態をみると、交流の広がりを「感じている(「大いに感じている」+「まあ感じている」)」と回答した人の率は、学習成果を「十分生かしている」人で 73.4%、「ある程度生かしている」人で 73.6%であった。特に、学習成果を「十分生かしている」人の 46.7%が、交流の広がりを「大いに感じている」と回答していた。

一方、学習成果を「あまり生かしていない」と回答した人で、交流の広がりを「感じている(「大いに感じている」+「まあ感じている」)」と回答した人の率は 49.5%、「まったく生かしていない」と回答した人では 40.0%であり、学習を通しての交流の豊かさが、人びとの学習成果の活用に大きな影響を与えていることが明らかになった。

次に、学習を通じた交流の広がりを感じている程度別にみた、学習成果の活用ニーズをみると、交流の広がりを感じている程度が高い人ほどニーズが高くなっていたのは、「地域の子育て・育児の支援」、「地域のボランティアや NPO 活動など」そして「健康の維持・増進」であった。逆に、交流の広がりを感じている程度が低い人ほどニーズが高かったのは「仕事や就職・転職」であった。特に、「地域のボランティアや NPO 活動など」では、交流の広がりを「大いに感じている」人の率が、「仕事や就職・転職」では、交流の広がりを「まったく感じていない」人の率が、他の交流の広がりを感じている程度と比較して非常に高くなっていた。

## 参考文献

- 1) 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門—孤独から絆へ—』中央公論新社 2011 年、p.1。
- 2) 内閣府『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』2002 年。